

二〇一七年二月八日

白髪の脳裏に今も開戦日
荒星や自販機一つ無人駅
恙なき余生願ひて日記買ふ
草庵へ閉ざす結界落葉道

二〇一七年二月七日

川底に万華鏡なす散紅葉
鶴折るによきと取り置く古暦
ひなたぼこ特等席はいつも猫
最高峰とて寒風の巖に佇つ
黄落の樹下に真つ赤なポルシェかな
べつ甲に透きて美味さう煮大根

二〇一七年二月六日

膝の上の猫とお喋り日向ぼこ
四阿の屋根に嵩なす落葉かな
菩提寺の砦のごとき枯木立
星一つ寄せぬ孤高の冬の月
住職の昔語りや落葉焚く
黄落に紛れしテニスボールかな

二〇一七年二月五日

小走りに行き交ふ人や街師走
後ろから追越す風の落葉かな
かみ合はぬ老の会話や日向ぼこ
家中に大根炊く香満ちてをり

三刀

智恵子

満天

なつき

智恵子

よし女

菜々

せいじ

やよい

はく子

満天

せいじ

よう子

菜々

智恵子

ぼんこ

満天

はく子

はるよ

はく子

枯蘆や遊里の昔語り草

宏虎

玻璃内に並ぶ鉢植冬日燦

そうけい

雑木山スクランブルに冬日差す

明日香

着膨れてペンギン立ちに電車待つ

たか子

真つ赤なる子らのほつぺや焚火の輪

智恵子

二〇一七年二月四日

ひと指で鳴らすピアノや小夜しぐれ
濯ぎもの干してしばらく日向ぼこ
マンションの窓から声や焼芋屋

更紗
はく子
こすもす

二〇一七年二月三日

葬送の煙と見たる枯野かな
すぎ苔に心地よき気な落葉かな
寒禽の影交錯す神の森
中腹の茶店閉ざされ山眠る
月冴ゆる闇に波音聞くばかり

三刀
たか子
さつき
たかを
更紗

二〇一七年二月二日

日向ぼこ手話の会話のはずみけり
竹と竹あひ撃つ音や北風
七五三小首傾げて写真撮る
湯豆腐に六腑ほぐるる酒の酔
白線の見えぬ落葉の駐車場
庭の色日毎に失せて冬ざるる

更紗
せいじ
さつき
宏虎
せいじ
菜々

毎日句会みのる選・二〇一七年二月一〇日